

武力で平和は守れない

これは「生きるための」戦いだ。

アフガニスタンとパキスタンで、病や貧困に苦しむ人々に寄り添い続けた男、医師・中村哲。戦火の中で病を治し、井戸を掘り、用水路を建設してきた。なぜ医師が井戸を掘り、用水路を建設したのか？その答えは、命を見つめ続けた中村の生き様の中にあり、私たちはこの映画で中村が生き、その軌跡をたどることになる。



「彼らは殺すために空を飛び、
我々は生きるために地面を掘る。」 —中村哲

中村の誠実な人柄が信頼され、医療支援が順調に進んでいた2000年。思いもよらぬ事態に直面し、中村の運命は大きく変わる。それが“大干ばつ”だ。渇きと飢えで人々は命を落とし、農業は壊滅、医療で人々を支えるのは限界だった。その時、中村は誰も想像しなかった決断をする。用水路の建設だ。大河クナールから水を引き、乾いた大地を甦らせるというのだ。しかし、医師にそんな大工事などできるのか？戦火の中で、無謀とも言われた挑戦が始まった。

「ここには、天の恵みの実感、誰もが共有できる希望、
そして飾りのないむきだしの生死がある。」 —中村哲

専門家がいないまま始まった前代未聞の大工事は、苦難の連続だった。数々の技術トラブル、アフガン空爆、息子の死…中村はそれらの困難を一つ一つ乗り越え、7年の歳月をかけ用水路は完成。用水路が運ぶ水で、荒野は広大な緑の大地へと変貌し、いま65万人の命が支えられている。そして—。

2019年12月。さらなる用水路建設に邁進する最中、中村は何者かの凶弾で命を奪われた。その報にアフガニスタンは悲しみに沈み、ニューヨークタイムズ、BBCなどが悲報を世界に伝えた。あれから2年半。日本ではその生き方が中学や高校の教科書で取り上げられ、母校の九州大学はその思索と実践を研究し始めた。中村の生き様は静かに語り継がれ、輝きを増しながら人々を励まし続けるだろう。そして用水路はこれからもアフガン人の命を支え続けていこう。

戦火のアフガニスタンで21年間継続的に記録した映像から、これまでテレビで伝えてきた内容に未公開映像と現地最新映像を加え劇場版としてリメイク。混沌とする時代のなかで、より輝きを増す中村哲の生きざまを追ったドキュメンタリー！

— [劇場版] について —

この映画は、2022年に完成した作品で [DVD版] とは異なって、2019年中村哲さんが凶弾に倒られた後の、アフガニスタンの状況を描いています。

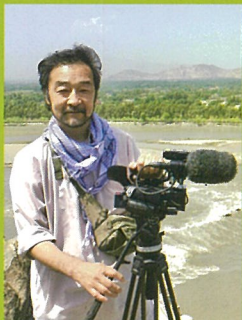


谷津 賢二 (監督/撮影)

1961年栃木県足利市生まれ。県立足利高校から立教大学社会学部に進学。大学卒業後テレビニュース業界で働く。94年に日本電波ニュース社入社。95年から98年まで日本電波ニュース社ハノイ支局長。登山経験を活かし、ヒマラヤ山脈、カラコルム山脈、タクラマカン砂漠など、辺境取材を多数経験。1998年～2019年アフガニスタン・パキスタンで中村哲医師の活動を記録。これまでおよそ80か国で取材。

受賞歴

- ◆ 1998年 NHK「ネパール 塩の隊商がゆく」 ATP 郵政大臣賞
- ◆ 2004年 NHK「アフガニスタン 戦乱と干ばつの大地から」ギャラクシー奨励賞、ATP 優秀賞
- ◆ 2016年 NHK「ベトナム戦争 フィルムの若者を探して」国際ビデオフェスティバル (アメリカ) ゴールドカメラ賞
- ◆ 2018年 NHK「武器ではなく命の水を～医師・中村哲とアフガニスタン～」ギャラクシー奨励賞、ATP 優秀賞、ワールドメディアフェスティバル (ドイツ) 金賞
- ◆ 2020年 NHK「良心を束ねて河となす～医師・中村哲 73年の軌跡～」 ATP 総務大臣賞
- ◆ 2023年 「劇場版 荒野に希望の灯をともし」日本映画撮影監督協会 (JSC) より撮影に対して第31回 JSC 受賞



16ミリ試写室



『16ミリ試写室』は1977年に発足。「どこでも素敵な映画館」を合言葉に、県や市の視聴覚ライブラリー所有の16ミリフィルムや映写機を活用し、視聴覚教育活動を続ける女性のNPO団体です。横須賀市内の図書館やコミセンなどの社会教育施設、老人ホーム、障がい者施設、地域の集会室などで年間約70回の映画会を開催しています。さらに、「心に響くメッセージを廉価で届ける」を目的に、ドキュメンタリー映画を中心に有料上映会も開催しています。2013年春 地域交流支援活動奉仕団体として緑綬褒章を受章。

